

第39回全国中学校バスケットボール大会に参加して

『心・技・体』の充実から全国へ

帯広市立緑園中学校
バスケットボール部顧問
久朗津 敏晃

感謝

この1年間は私にとって忘れることのできない1年間になりました。男女一人顧問になり、1年間通して指導したこと、『それぞれの勝利の形』を追求し、成果を得ることができました。たくさんの人との出会いや、助言により自分自身を成長させることができた1年間であったと感謝の気持ちでいっぱいであります。

『それぞれの勝利の形』

生徒達が、入学してきた時よりも成長したことを実感して、自分たちが立てた目標に対して、毎日の練習を全力で取り組み、悔いを残さず気持ちよく最後の試合を終えられることが、指導者として、指導をされていて最高の瞬間だと思っています。この1年は、男女ともに『それぞれの勝利の形』を作り上げてくれた最高の年になり、私としても思い出に残る年となりました。

取り組み

全国大会に向けて取り組んできたことは、『心・技・体』の充実でした。自ら考え行動できる生徒の育成に多くの時間を費やしました。技の部分では、状況判断の練習しかやっていないくらい『見る』ことの重要性を強調してきました。体の部分では、体の使い方を注意深く見ながら、将来どんなことにも対応できる選手の育成をしてきました。

また、跳ぶ・走る・打つバスケットの追求にも力を注ぎました。練習の半分以上が走っているかシュートを打っている事に費やされ、大きな選手も小さな選手も、エンドラインからエンドラインまで全速力で走り抜ける場面は、全国大会の大舞台でも通用し、緑園中の大きな特徴になりました。走るためには、リバウンドの確保も重要となるため、リバウンド練習にも多くの時間を費やしました。ディフェンスを頑張り、リバウンドを確保し、走り、打つ。選手達は、厳しい練習に嫌な顔せずよく頑張っついてきてくれました。

札幌全道大会での感激

全道大会の組み合わせが決まり、こちらサイドに強豪校が、固まっていたことには、全く動揺しませんでした。なぜなら、札幌全道ということは、札幌をすべて倒さなくてはならないと初めからわかっていたからです。そして、準々決勝・札幌発寒中、準決勝・札幌中央中、決勝・札幌北陽中と札幌三校を倒しての優勝は、今年のように札幌全道でしか味わうことのできない格別な大会となりました。中でも、札幌中央中との準決勝が、最大の山場で、離れそうで離れない展開が続き、苦しい試合でしたが、ディフェンスを絞って、タイミングよくこちらのシュートが決まって、勝つことができました。新人戦での敗戦から、札幌中央中との全道頂上決戦を思い描きながら7ヶ月間を過ごしてきましたので、準決勝で終わってしまったのが少し残念な気もしました。

岐阜稲羽中戦

全国初戦とあり、選手の硬さが目立ちました。いつもは入っているシュートが入らず、苦しい試合展開が続きました。事前スカウティングでは、3Pシュートのチームだと聞いていたので、ディフェンスでは、手をしっかりと上げて簡単には打たせない、自分たちのバスケットである、ディフェンスから速攻を出すことを確認しましたが、試合が始まるとダブルポスの合わせで点数を取られる事が多かったので、アジャストするまでに多少時間がかかりとまどいました。後半には、堅さもとれて速攻もできるようになり、自分たちのペースでゲームを進めることができました。終盤、相手のプレスにあい、追い上げられそうになりましたが、何とかしのぎ、全国大会初勝利を得ることができました。やはり全国大会では簡単には、勝たせてもらえないことを実感しました。

松江第三中戦

第2試合は、両チームとも予選突破が決まっておりどちらが、1位で通過するかというゲームになりました。相手は、4番を中心にオフェンスを組み立ててくるチームなので、的を絞り全員で守る確認とやはり自分たちのバスケットである走るバスケットを心がける事を確認しました。予選突破が決まっていたせいか、選手達は自信にあふれ、自分たちのバスケットを思う存分発揮することができたように思います。初出場で組み合わせにも恵まれ、予選1位で通過できたことは、決勝トーナメントに向けて大きな弾みとなりました。やはり北海道1位での出場がここでも大きく作用していました。

決勝トーナメント組み合わせ抽選会

決勝トーナメント組み合わせ抽選会はイメージ（北北海道大会の抽選をイメージしていた）していたよりも厳粛な雰囲気で行われ、緊張の中開催された。ベスト4決めで、福岡姪浜中と東京京北中の対戦が決まったときには、会場中がどよめき、そのすぐ後の抽選だったので安心して引くことができました。抽選の間、皆さんメールのやりとりなど情報戦がすでに始まっていることを感じました。

決勝トーナメント1回戦 群馬並榎中戦

関東大会で長身チーム梅ヶ丘を倒しての全中出場チームとあり、緑園中にとっては分の悪いチームかもしれないと思っていました。このチームも4番を中心にオフェンスを組み立ててくるチームだったので、前試合同様、的を絞り、ディフェンスをする。相手ディフェンスの替わり際に気をつけることを確認しました。接戦にはなりましたが、タイミング良く速攻からシュートが決まり、ベスト8進出が決まりました。

準々決勝 石川布水中戦

相手は全国3年連続出場中の常連チームで、相手の監督は私の大学の後輩ということで運命を感じる一戦となりました。この試合は、とにかく今までやってきた走るバスケットと気持ちのこもったディフェンス、そしてこの試合に勝てば、どんなに素晴らしい事が待っているかというメンタル面の指示を多く出しました。

マッチアップは前試合で活躍していた。相手⑭にディフェンスの得意な④熊沢 誠也をつけていましたが、それが誤算でした。⑭を気にしすぎてヘルプに行った際他の選手にタイミング良くシュートを決められた場面が多くありました。

また、最終的に勝敗を分けたのはゾーンプレスへの対応でした。全道大会まではドリブルで運んできた事が多かったのですが、この試合では、なかなか運べずにリズムを崩しました。パスで運び出してからは、リズムは戻りましたがその数分間での差が後々大きく響きました。

最終的には接戦になる事は想定していましたが、こちらから動くタイミングを計っていましたがなかなか展開が変わらずに残り3分でプレスという形になりました。もう少し早く動き出せば良かったと今では後悔しています。最後の3分間で、奇跡を見せてくれるのではないかと思うくらい凄まじい追い上げを見せてくれた3年生の人間性がすべてこの試合に注がれた事を感じられる試合でした。

初めての全国大会を経験して

全体を通して感じた事は、強いディフェンスと5人のオフェンスでした。5人のオフェンスとは、的を絞る事が出来ないチームです。今回の緑園中は、的が絞りづらいチームだったと思います。各チームともゾーンやチェンジングディフェンスなどを仕掛けてくるチームが多かった事が証拠になると思います。その点では、リクルートできない公立中学でこれだけの選手がそろふ事は、滅多にない事だと思っています。また、強いディフェンスとは、マンツーマンであろうがゾーンであろうが、すべての人間が連動して動き、それぞれの場面で機能できているチームが勝ち上がっていました。特に京北中のゾーンディフェンスは、素晴らしかったと思います。

最後に、今回初めてコーチという立場で全国大会を経験できたわけですが、やはりまた来たいという思いが残りました。次回出場できた時には、必ず最終日まで残れるようなチームを作り、あの熱い全国大会の地に戻ってきたいと思いました。